

## 生命の摂理が語る親と子の道理

今や“我”の本体が遺伝子に在ることは明らかになりました。世界に唯一人の存在である“我”を我たらしめてゐるものは、その遺伝子が世界に唯一つしか存在しないものだからです。1万冊分もある“我”の設計書の大部分は、世界中の他の人間の物と同じ内容の物です(だから、同じ人間になる訳です)が、他には絶対に無い“我”独特の部分があります。それが“我”を我たらしめてゐるのです。

その1万冊の“我”の設計書は、父親から5千冊、母親から5千冊を受継いだものです。そして“我”もまた“我”の設計書の中から5千冊を選び抜き、これに配偶者の設計書の5千冊を加へて1万冊とし“我”を一層「より良き我」たらしむべく、「我が子」としてこの世に送り出すのです。ですから、我が子を生んだといふ事それ自体が“教育”そのものである、といふ事も出来るのです。

生物に雌雄の性別がまだ存在しなかった時には、全く同一の生物を殖やすだけであり、進歩と言へるものは有り得べくも無かったのですが、何かの原因で雌雄の両性が生じ、自分の遺伝子に配偶者の遺伝子の半分を加へる事に依り、初めて進歩が始まりました。このやうな生物の進歩の果てに、人類がこの世に出現したのであります。

さて、生きとし生ける物は総て死を免れる事が出来ませんが、それは「遺伝子に死のプログラムが用意されてゐるからである」といふ学説があります。恐らくさうであらうと私も考へます。生物に両性が生じ、「両性の遺伝子の合体に依って新しい生命が創られる」ことで進歩が生じたのですから、新しい生命を創り出した後もなほ古い生命がいつまでも地球上に存在してゐては邪魔で、且、新しい生命を創り出した意味が無いこととなります。生命を創り出す程の力を有った遺伝子が、新しい生命を創り出すだけで、言はば不用になった古い生命を消滅させるプログラムを用意してゐない訳が無い、と考へられるからです。

とすれば、親は子が生れたら言はば蟬の抜け殻むしみたいな存在です。我が子を自分より大切に思ふのが当然の道理です。ですから、危機に瀕した時には、親が我が身を犠牲にしても我が子を救はうとします。

また、人の子の親たる者は「子を立派に教育する事が、人間として最も大切な仕事である」といふ認識を有つ必要があると思ひます。人間として、どんなに立派な仕事を成し遂げても、我が子を育て損ねたら、差引きゼロであると評価されても仕方がないでせう。